

# 姫月に重ねて

(平成二十六年 degree 寮歌)

松元一平君 作歌  
寺尾佳隆君 作曲

観月過ぎゆく晩秋の夜、穹蒼の天空高く舞ひたる月は今宵満つるかな。  
その清輝に映えし姫が鏡水は、鹿が純瞳に宿らむ。  
月影は鹿を誘ひ来たりしこの神無月に何をば見せむ。

## 一

時移ろひて人世は変われども  
今宵も満月は我らを照さむ  
夜の邪帳をはらはむと  
流歩む汝は楡に似たれど  
風流を掴まむ芽に感ず  
風習に付和せし  
狗と成らざらめや  
さて映りこむ我が鏡瞳に  
風習だに愛づるその気概

## 二

清澄みたる想ひ知る由もなく  
今宵の三日月は川面に映らむ  
かの日の月影とは違へども  
人世に充つ解答を自ずと心得  
此れは汝の求望にか  
漲る想ひなどか劣らむ  
さて映りこむ我が鏡瞳に  
身を委ねばやその清流

## 三

静と唸りし雨霽したたれば  
今宵も我は朧月を仰がむ  
姫が麗姿を追憶ふべく  
汝が想ひは涙と落流れ  
透かし斜光にさらさるる  
閉じなむ凌雲よこひ願はくば  
さて映りこむ我が鏡瞳に  
嗚呼汲まれたしその厭心  
悲しかりけむ晩秋の夜は  
月影映えて人影も追ひ得じ